

2008年1月12日付

新時代第25回本部幹部会
上 - 2

広布第2幕第13回全国青年部幹部会 名誉会長のスピーチ

1月8日は原点の日

一、きょう1月8日は、創価の師弟の原点の日である。

昭和20年(1945年)、獄中闘争を続けておられた戸田先生が、牧口先生の獄死を知らされた日だからである。

牧口先生は、前年の11月18日、すでに逝去されていた

戸田先生は、この日、妙法の巖窟王となって、牧口先生の正義の仇討ちを、固く誓われた。今年は、牧口先生の殉教から65年である。

一、初代会長の牧口先生と、第2代会長の戸田先生が、日蓮仏法の生命尊嚴の理念を貫き、軍部権力に逮捕されたのは、昭和18年の7月であった。

この軍部の大弾圧で、当時の学会の幹部21人が逮捕された。過酷な取り調べに次々と正義を曲げていった。

最後まで信念を護り抜いたのは、牧口先生と戸田先生だけであった。

戦後、戸田先生は、小説『人間革命』を執筆され、非道な獄中の様子も書き残された。

刑事の取り調べに対して、戸田先生が、こう言い放ったことが記されている。

「牧口先生を粗末に扱ってはいまいな」

「(学会のことは)理事長のぼくが全部切廻していたんだ。ぼくのいうことを聞きさえすれば、なんでも判るんだ。牧口先生もほかの連中も帰した方がいい」と。

獄中で、戸田先生は、ひたすらに祈っておられた一切の罪は、若い私に集まればいい。ご高齢の牧口先生が一日も早く釈放されますように、と。

これが師弟である。これが真実の弟子である。

平和な社会を！

一、先師・牧口先生は獄死された。

しかし、不二の弟子たる戸田先生は、生きて牢獄を出られた。

昭和20年の7月、敗戦直前の東京の焼け野原

そこに、戸田先生は、決然と一人立って、深く心に誓われた。

「牧口先生の志を受け継いで、平和な社会をつくるのだ。それが、牧口先生の仇を討つことだ！」と。

2年間の獄中闘争によって、戸田先生の体は衰弱の極みにあった。しかし、胸中には、師弟の黄金の誓いが光を放っていた。

広宣流布という、全人類のための「平和革命」「幸福革命」そして「人間革命」に、わが一身を捧げていかれたのである。

師弟の魂で勝ち進め！

一、広布に戦い抜けば、必ず、大きな障魔が立ちはだかる。

「如説修行抄」に仰せである。

「真実の法華經の如説修行の行者として、師となり、その弟子となるならば、三類の敵人が必ず現れるのである」(御書501ページ、通解)

この御聖訓通りに、三類の強敵と戦い、勝ってきたのが、創価の三代の師弟である。

戸田先生は、牢獄までもお供して、牧口先生にお仕えした。

私は、青春のすべてを捧げて、大難と戦う戸田先生に尽くし抜いた。

嘘や中傷で、先生を貶(おとし)める人間がいれば許さなかった。ただ一人で、どこにでも出て行って、正義を叫んだ。

ただ師匠のために動き、師匠のために祈り、師匠のために生きた。私は厳然と師匠を護ってきた。

何の悔いもない。わが人生は師弟不二であった。

烈風の青春時代を、私は、この師弟の魂で勝ち進んできたのである。

人類史に輝く勝利の劇を！

一、牧口先生、戸田先生を、平和と正義の大偉人として、第3代の私は、全世界に宣揚してきた。

牧口、戸田両先生の直弟

子として、各国各地の最高峰の大学や学術機関から、数多くの名誉学術称号を拝受してきた。世界中から顕彰される時代となったのである。

これまで名誉会長に贈られた、海外からの名誉学術称号は「246」を数える。さらに決定通知も届いており、本年、「250」を超える予定である。世界一の知性の宝冠である。

また、国家勲章は「27」。

世界の各都市からの名誉市民称号は、台湾の龍崎(りゅうき)郷からの「名誉郷民証」(5日)を含め、「610」。その代表をあげると、アメリカのサンフランシスコ市、イタリアのトリノ市、ブラジルのサンパウロ市、チリのサンティアゴ市、ペルーのリマ市、キューバのハバナ市、オーストラリアのオーバン市、中国の西安市、台湾の台北市、韓国の釜山広域市、ネパールのカトマンズ市、トルコのイスタンブール市などである。

さらに、パラオ共和国、トンガ王国、ミクロネシア連邦からは「名誉国民」の称号を受けている

こうした世界からの栄誉は、すべてが、広宣流布に殉じられた牧口、戸田両先生が偉大であった証しにほかならない。

そしてまた、この栄冠は、創価の師弟に連なる全国・全世界の同志の皆様の大福運となって、子孫末代に

まで流れ通っていくことは、御聖訓に照らして間違いない。

創価の三代の師弟は、尊き同志の皆様とともに、堂々と、人類史に輝く勝利の劇を飾ったと、私は高らかに宣言したい!(大拍手)

一、戸田先生は、ある日の手紙の中で、こう綴っておられた。

私の信仰は天下の正義である。この信仰の『信』『行』『学』を、私は、師匠である牧口先生のおかげで得ることができた。ゆえに私は、若人の情熱を失わないのだ

先生の胸中には、仏法の真髓を教えてくださった師への感謝の念があふれていた。

信仰への確信。

師匠への報恩。

その心が一切の勝利の原動力であった。

新成人に期待!

「きょうは、新成人のメンバーも参加している。おめでとぅ!(大拍手)

今年は、皆様方の「新成人の木」として、アメリカSGI(創価学会インタナショナル)のフロリダ自然文化センターに、「榿の木」が植樹される(大拍手)。

榿は、「森の王」と呼ばれる堅固な樹木である。「勇氣」「力」「長寿」などの象徴とされている。

大文豪ゲーテは語った。

「風や嵐から安穩に守られて育つと、榿の木もためにな

る。しかし、自然と戦うこと百年にも及べば、まことに強く堂々たるものとなって、その伸びきった姿を目のあたり見ては、誰しも驚嘆せざるをえないのだ!」(エッカーマン著、秋山英夫訳編『ゲーテとの対話』社会思想社)

戸田先生は、ある青年部員に次のように指導された。

「難にあった時に、"賢者は喜び、愚者は退く"のです。愚か者になってはいけません。難をきっかけに、自分を見つめなさい。

みっちり信心してごらん。今の10倍の功德を受けられるよ」と。

私は、限りない期待を込めて、新成人の皆さんに呼びかけたい。

"学会の創立100周年を創りゆく君たちよ! 試練の嵐を恐れるな! 強く堂々たる大樹と育ちゆけ!"

私自身、そのようにして自分を鍛えてきた。微塵も後悔はない。

戸田先生という師匠のもとで、いかなる嵐も勝ち越えた。"これ以上は、だれもできない"というほどの、ご奉公をさせていただいたつもりである。「本当の師弟の道」を生き、「真実の仏法の世界」をつくりあげてきた。

一人の「青年」が立ち上がったのである。

仏法の正邪を決する1年に

一、建治2年(1276年)の正月の11日。大聖人は御手紙にしたためられた。

「今年は殊に仏法の邪正
たださるべき年か」(御書89
3ページ)と。

今年は、特に、仏法の正
義と邪悪が明確にされるべ
き1年であろう、との仰せで
ある。

1年また1年、正邪を明快
に峻別する。そして、正義の
勝利の証しを、堂々と、厳然
と、打ち立てていくことだ。こ
の「破邪顕正」「仏法勝負」
の魂こそ、学会精神の真髄
である。

大聖人は「悪を滅するを功
と云い善を生ずるを徳と云う
なり」(同762ページ)と仰せ
である。

唱題に励み、広布を進め、
さらに、人々を不幸に陥れる
悪を責めてこそ、自分自身
の生命の悪を滅することが
できる。それが功德である。
悪と戦ってこそ、功德が生じ
るのである。

一、16・17世紀スペイン
の劇作家ローペ・デ・ベーガ
は、ある戯曲のなかで、王
に、こう語らせている。

「余としては、仁慈(じんじ)
を第一とすべきであるが、正
邪をただすことも、また、な
おざりにしては居らぬと知る
がよい」「成敗の正しきを失
わしめて、慈悲を行うは誤り
である」(永田寛定訳「上なき判
官これ天子」、『世界古典文庫3
6』所収、日本評論社)

正邪を決しゆけ！

この明快なる文学者の叫
びを、天高く「正義の旗」を
掲げゆく、勇敢なる青年部

の諸君に贈りたい。

(下に続く)

新時代第25回本部幹部会
上(完)